

学外コースにおけるPhysical Recreation “ヨット” を通してのレジャー教育

—ヨット実践プログラムからの満足度の分析—

○上野直紀 (いわき明星大学)

鈴木秀雄 (関東学院大学)

五十嵐幸一 (いわき明星大学)

キーワード：ヨット実践プログラム、レジャー教育、ヨット授業

1. はじめに

ヨット授業¹⁾は1985年(昭和60年)よりスタートし、今年で10年目に入り、延べ603名が学外コース“ヨット”に積極的に希望し、4泊5日、27コースのヨット実践プログラム²⁾に参加した。この中である受講生は、『“ヨット! 万歳!”』と題した感想文を次のようにまとめた。“「生まれて初めてのヨットでのセーリング・・・自分達に用意されたプログラムで自分達の手で操船したことにとっても感動している。無知から始まった何から何まで初めて知るヨット講義は、この先どうなるのだろうかと不安でたまらなく、心配ばかりしていた。しかし、いよいよ海に出航した時、波の高さに揺れるヨットが上下に動きとても気持ちよかった。クルー全員で力を合わせ、タック、ジャイブをして戸惑いながらデッキ上を移動していたことをいまさらながらなつかしく思う。海に落ちそうになりながらも、協力して合図を確かめ、行動する中で厳しい大自然を知った気がする。大きな波の上を小さなヨットがどんどん水を切って進んでいると気づいた時、一層の感動を覚えた。こわい体験もあり、いつも荒れている海がおさまり、湖のようになったり、濃い霧が発生して前方が見えなくなり、レーダーを見ながら進んでいく中で何かに衝突しないだろうかという恐怖心を抱きながらの気持ちは、今でも忘れられない。風が止んでしまった風の感覚は逆に悪天候の状況を想像すると次にどのようなことが起こるか、自然に対する一層の不気味さを感じる。大自然の中で自分自身の小さな存在に気づき、個人だけでは生きていくことができないのを知る。クルーが協力して自然と共生していくことを知るのである。この学外コース“ヨット”で多くのことを学ぶ貴重な体験をしたと思う。恐怖だった霧、大波に直面した時の驚きは、一生忘れることができない・・・」と表現している。

ヨット実践プログラムにより、シーマンシップ³⁾が養われ共同生活の中から自分自身の役割分担を果たす中で感動体験から満足感を得て、感動体験を実感し、満足感を得ていることが分かる。

2. 研究の目的

体育実技授業のヨット授業が効果的に展開されるためには、カリキュラムはどうあるべきか、過去9年間にわたって検討してきた。(実践プログラム：学外コースにおけるマリンプログラムとしてのヨット授業の実践は本学会の研究報告の資料を参照)

本研究では実践プログラムからの満足感を分析し、精査をすすめ、学外コースにおける

Physical Recreationとしての“ヨット”をレジャー教育として理解しつつ、ヨット実践プログラムのそれぞれの内容についての満足度を明確にすることを目的にした。

3. 研究の方法

本研究では、“ヨット授業に対する満足度の調査”の調査としての質問用紙により各項目の研究の目的でかかげた5項目の分析を試みた。ヨット実践プログラムからの満足度の課題を、1)基礎的理論及び初歩的技術の獲得、2)クルージングへの直前アプローチ、3)クルージングテクニックの獲得、4)自然への対応、5)総合的シーマンシップと日常生活での充実感を得るための対策、とした。

4. 分析

ヨット実践プログラムにおける調査の総合的な検討から以下の結果が得られた。

1) 基礎的理論及び初歩的技術の獲得

- ① 事前講義展開方法（ビデオ、パネル等）
- ② 疑似体験教育

2) クルージングへの直前アプローチ

- ① 出航直前の五大点検の徹底化
- ② 艙装対策

3)クルージングテクニックの獲得

- ① 対応能力の養成
- ② ハイテクニックへの応用技術

4)自然への対応

- ① 外洋体験活動
- ② 自然との驚異の体験活動

5)シーマンシップと日常生活形態への対応

- ① 互助精神の涵養
- ② 目的達成のための充実感への対策

5. 考察と今後の課題

各年度毎に実践プログラムより授業内容に統括的検討を加え、5つに分類し、満足度、理解度を抽出した。以下の5項目の考察により今後の課題といえるものが掲げられた。

- ・考察と今後の課題 1): “基礎的理論及び初歩的技術の獲得”に関しては、初めての体験である為、ヨット授業の中において全体の流れを把握するが、疑似体験の形態が多くなる学習のため、その態度は積極的に欠ける様相を呈する。

この課題解決については視聴覚教材の使用等によりいかに疑似体験を実体験に近い形態に近づけるかにかかっているといえよう

- ・考察と今後の課題 2): “クルージングへの直前アプローチ”に関しては、はじめ乗船す

るヨットの大きさに驚き、膨大なヨットの呼び名に自信をなくし、航海計器類やセールの艦装については取扱いに苦しむ様相を呈する。

この課題解決には、初乗船では、まず“緊張感”を取り去り、リラックスさせ、各点検や洋上作業等、デッキ上ではその都度、指示場所を変えるという変化をもたせることが必要といえよう。

- ・ 考察と今後の課題 3): “クルージングテクニックの獲得”に関しては自ら操船する驚きと感動と思った方向にすすまないヨットに苛立ちと頭の中はパニック状態であるが、みな、真剣に取り組んでいる。

この課題解決には、指示されたコースを走るためには“風”を知ることがを体験し、セールトリムは、舵輪を握る時間と回数によって知る。リーフ（縮帆）やスピン作業は、ヨット最大のハイライトでありクルーのチームワークにかかっているといえよう。

- ・ 考察と今後の課題 4): “自然への対応”に関しては、風力、風向、潮流の中での走り方での自然の驚異に感動し、また、自然とのふれあいに感動を新たにしている。“船酔い体験者”は多い。

この課題解決には“船酔い防止”はヨット授業の最大事項であるが、積極的なヨットへののめり込み、つまり進んで洋上作業、クルー同士の会話を行うことにつきる。

荒天時、天候急変時に対する安全確保の仕方について自然の力と現実の認識にかかっているといえよう。

- ・ 考察と今後の課題 5): “シーマンシップと日常生活形態”に関しては、運命共同体のような形態でいるヨット乗船中は互助精神を学び、みんなが目的達成の為の充実感を体験しながらシーマンに育っていくのである。この課題解決には、自分の役割と目的達成のための船内での積極的な行動が人と人との交流を円滑にすることを知る。小さな出来事もやがては大きな事態に発展していくことに気づき、早目早目の対応に気づくことが大事であることにかかっているといえよう。

ヨット実践プログラムの内容の充実が今後、ヨット授業の継続となり、レジャー教育のさらなる発展となり、“ヨット”はレジャー教育⁴⁾としての貴重な一翼を担っているといえる。

〈引用文献〉

- 1) 上野 直紀・鈴木 秀雄「シーズンコース“ヨット授業”参加学生の意識調査」
第40回 日本体育学会 1989年10月
- 2) 上野 直紀・鈴木 秀雄「レジャー及び生涯スポーツとしての海洋講座」
第23回 日本レジャー・レクリエーション学会 1993年10月
- 3) 上野 直紀・鈴木 秀雄・五十嵐幸一「大学におけるレジャー教育・生涯スポーツ

としてのヨット」

第24回 日本レジャー・レクリエーション学会 1994年9月

- 4) 鈴木 秀雄 「生涯スポーツの意味(The Meaning of Life Integrated Sports)」
『日本大学体育学研究』第25集 1991年3月

〈参考文献〉

- (財) 余暇開発センター編『レジャー白書'95』1995年
通産省産業政策局編 「ゆとり社会の基本構想」 1991年
中小企業庁小規模企業部サービス振興室編集 「海洋性レジャーのビジョン」
1993年
(財) 日本海事広報協会「海洋性レクリエーションの現状と展望」 1993年
J・ルスマニア「The Annapolis Book of SEAMANSHIP」 鯨書房 1989年
海上保安庁 「平成5年度版 海上保安白書」 1993年
上野 直紀 「本学における新入生の体育・運動観の実態-1-」明星大学研究
紀要第21号 人文学部 1985年
小島 敦夫 「YACHTING」 成美堂出版 1985年
鈴木 邦裕 「ヨットマンの航海術」 海文堂 1980年
土井 悦 「ヨット・モーターボート・クルーザー運用実務」 舵社 1983年
関根 久 「ヨット専科」 成山堂 1975年
関根 久 「クルーザー教室」 舵社 1979年
関根 久 「クルーザーのためのメンテナンス読本」 舵社 1985年
川島 正道 「ベストオブセ-ルトリム -セ-ルトリムの実践解説-」 舵社 1987年
大河原明德 「ヨットマンのための天文航法」 舵社 1980年
中村 繁 「明日の天気わかる本、天気図の読み方、作り方」 舵社 1980年
中沢 弘 「結びの図鑑 PART 1, 2」 舵社 1980年